

お茶の水女子大学の教育に関する卒業生座談会式調査

リーダーシップ養成教育研究センター 講師 宝月 理恵

実施概要

お茶の水女子大学は、長く女子の高等教育の指導的役割を担ってきた。社会のグローバル化が進展する中で、国際的視野をもってリーダーシップを発揮する女性を輩出することが本学の使命であり、同時に、本学が築き上げてきた女性リーダー育成のノウハウを理論化し、社会に還元することを通じて、男女共同参画社会の実現に寄与することが、国立女子大学としての社会的使命でもある。そのために、これまでの本学の教育成果を検証し、今後の教育研究の方向性を固め、教育・研究環境を一層整備することが重要な課題となっている。

そこで、女性リーダーとして活躍している本学卒業生を母校に招き、本学のこれまでの教育成果や今後の教育指針について提言を得るための座談会式調査を企画した。サンプリング手順としては、桜蔭会の協力を得て2012年2月に実施した「卒業生OGデータベース」に協力いただいた関東圏在住の卒業生のうち、企業、官公庁、NPO等の団体に勤務する卒業生約100名に電子メールにて調査協力を依頼し、2012年9月22日および30日の合計2日間の日程で総勢38名の参加者を得た。

座談会では、主に卒業年コーホートに基づいた5人程度の小グループを4～5つ形成し、グループ毎にインタビュアー(モデレーター)と副インタビュアーを配置した。事前に主な質問項目(インタビューガイド)を用意したが、基本的には参加者が発言のイニシアティブをとる流れの中で進められた。約90分間の座談会の中で、「お茶の水女子大学で学んだ意義」「本学の女性リーダー養成教育の評価」「グローバル人材育成のために求められる大学教育」「学び直しの場としての本学のあり方」などをテーマに、幅広い観点から活発な意見が提出された。以下にその内容の一部を提示する。

(1)お茶の水女子大学で学んだ経験について、メリットとデメリット

まずメリットとして、少人数制のきめ細やかな教育が評価された。さらに女子学生のみという環境によって、男性に頼らずリーダーシップを発揮する機会に恵まれたという意見が、特に理系の卒業生によって出された。また、現在のようなキャリア教育が提供されていない時代であっても、本学の強みでもある女性学やジェンダー系の授業によって、キャリア意識が醸成されたという意見が、特に文系の卒業生から多く出された。一方、国立大学としては女性教員比率が際立って高いことから、本学を卒業した女性教員・女性科学者がロールモデルとなり得ていたということも明らかになった。

一方で、少人数制であることによって、学科の結束が高まる場合だけでなく、逆に個人行動が優先され、まとまりのない学科になってしまう場合もあることが指摘された。学科ごとの結束や一体感の有無は学科間における違いが大きく、卒業後のネットワーク形成においても学科間格差を生じてしまっている。同窓生ネットワークの脆弱さは、小規模女子大学のデメリットとして最も多く指摘された点でもある。女性が社会で働き続ける過程には、なお多くの困難がある中で、同窓生女性同士のインフォーマルな関係性が、悩みや経験を共有しうる存在として求められていることがわかった。

(2) 本学で実施されている女性リーダー養成教育の評価

まず、「女性リーダー」という概念が具体的ではないという指摘が多く、どの領域のリーダーになるのかによって養成方法が異なるという意見が出された。ビジネスリーダーを育成するならば、経営学系統のカリキュラム開発を進めるべきであるという意見がある一方で、リーダーシップの発揮にはコミュニケーション力、発信力、幅広い教養などの基礎能力・コアスキルが必要であり、大学教育ではそういったコアスキルを養成する取り組みがなされるべきであるという指摘も多く挙げられた。さらに、女性によるリーダーシップは、男女両性にとって働きやすい社会を作るためにこそ発揮されるべきものであり、女子大学で理論構築を行う意義はあるが、社会の多様性を反映した場における実践を通して学んでいくべきであることが強調された。

(3) 社会人のための学び直し(リカレント教育)の場として、本学は何を提供すべきか

卒業生の提言には大きく二つの方向性があった。国立女子大学として本学が蓄積してきた学問を教養講座として社会人向けに還元するのか、ビジネス実務系を新たに提供していくのか。前者は、本学の強みである女性学や人文・生活科学系に重点化し、女性の多様なライフコースに柔軟に対応できる学びを提供するというものである。一方の后者は、女子大という既存の枠を超え、共学大と対抗しうるようなビジネス実務を提供する学習環境を整備して欲しいという要望である。オフィス街からのアクセスの良さという地の利を生かして、積極的に社会人向け授業を開講すべきであるとする意見もあった。総合的に、リカレント教育には潜在的需要があることが読み取れた。どのようなニーズに応え、どのような聴衆を対象として設定するのか。社会人向け教育については、今後一層の議論を深めていく必要があるだろう。

それぞれの参加者が自身の経験を振り返りながら、さらに社会人として、あるいは企業等の組織での指導者としての視点を付け加えて語る様子には、本学大学院生を中心とするインタビューも大いに引き込まれた。本調査で得られた提言は、今後の本学の教育環境の整備推進に活用される予定である。



図 1 座談会式調査の様子

卒業生交流会実施概要

上記「お茶の水女子大学の教育に関する卒業生座談会式調査」関連イベントとして、座談会終了後に卒業生と本学教員、およびインタビュアーを務めた本学大学院生が参加する交流会を開催した。ほぼ全ての座談会出席者が参加した交流会では、様々な業種の卒業生同士の交流が進み、また、時間内には本学歴史資料館のガイドツアーも行われた。

参加いただいた卒業生からは、「多職種・他業種の卒業生と触れ合う機会がこれまで十分ではなかったので、非常によい機会であった。これからは積極的に OG ネットワークを形成して欲しい」というご要望を数多くいただいた。在校生にとっても、卒業生にとっても、また大学にとっても、同窓生ネットワークの構築が急務であるとの認識を一層深め、今後は同窓生ネットワーキングの強化を推進していく予定である。



図 2 卒業生交流会の様子